

立ち上がったれんが、えん先の南天なてんの葉越しに鶴ヶ城をながめているとき、「帰ったぞ。」

うしろの格子戸があいて、四十三歳になった夫の豊助のあき黒い顔が見えました。明るい西の空を見ていたれんの目には、うす暗がり立つ夫の姿がよく見えませんでした。それでも明るい顔色と自信にみちた夫の目を見つけて、ほっと安心しました。

「大変な仕事をお引き受けしてきました。」

刀をはずして、豊助は着物を着がえることもなく妻の前にすわりました。

「藩の大事業じぎよをまかせられた。大工事になるぞ。」

れんの心に、また不安がわいてきました。身をかたくして、夫の顔を見あげました。

「お城の水がだんだん少なくなつてな。田にひく水も足りなくなる。だから